

大学生の種目トランスファーに関する調査研究

生涯スポーツゼミナール 1416047 野村 健太

1. 研究動機・研究目的

現代の日本社会において、高齢者になっても楽しめる生涯スポーツとして、トライアスロンが注目され始めている。また、1985年には2万人程度であった競技人口も2012年には35万人をこえるほどに増加し、これはアメリカの55万人に次いで世界で2番目の数字である。この35万人のなかには、全国の大学での部活動やサークル活動としてトライアスロンに取り組む学生も多く含まれているが、その大多数の人がトライアスロン競技を大学から始めている。日本の世間では、一つの競技に打ち込むことが尊ばれる風習がいまだに根強く、大学から新たにトライアスロンを始めた人たちの心理にどのような変化があったのか疑問を持った。

また、日本オリンピック委員会（JOC）選手強化本部では、東京2020に向けた選手強化プログラムの一環として、各競技種目のトップレベルにある選手の競技間連携、他競技種目からの転向を促進し、他競技の特性を活用・応用した新競技種目の選手の育成・強化推進事業を実施しており、日本トライアスロン連合でも、日本陸上連盟、日本水泳連盟と連携し、トライアスロンプログラムのトライアルを実施している。私はトライアスロン競技にある、新たな挑戦やこれまで伸ばしてきた能力の開花、これまで続けてきた競技への苦悩を打開するなどトランスファー競技としての多様な可能性があるのではないかと考え、主に3つのことについて明らかにするために調査を行った。1つ目は、トライアスロンへの関心に注目し、トライアスロンを始めたきっかけと、種目トランスファーをする以前に行っていたスポーツとの関連性や傾向を明らかにすること。2つ目に、種目トランスファーを介して、幸福度、心境、生活にどのような変化があったのかを明らかにすること。3つ目に、大学時の種目トランスファーの課題を明確化し、今後のトライアスロン競技の可能性を見出すことである。

2. 研究方法

本研究では、部活動・サークルを問わず、関東に拠点を置く大学生トライアスリートを対象とする。大学生は、大学での部活動やサークルといった組織を持っていることが多く、また、社会人のクラブのように記録向上を目的とする組織とは異なり、多種多様な目的をもつ人間で構成されている。そのためさまざまな動機やトライアスロンという競技に出会うきっかけが引き出されると考えられることからの対象である。また、学生トライアスリートが最も多いのが関東であり、より多くのデータを得ることができる。

研究方法については、関東学生トライアスロン連合に所属する大学生にアンケート調査を行い、その中から以前に行っていた競技や経緯が異なるように、複数名をピックアップし、インタビュー調査を行う。それ以外に、文献調査で先行研究である論文や研究の参考となるデータを活用し、研究を進める。

3. 主な結果と考察

幼少期には水泳を、中高では陸上競技の中長距離取り組んでいた選手が多いことがわかった。また、大学入学後にはトライアスロンという新しいスポーツに対する興味・関心を持ち、新たな環境で活躍の場を求める選手が多いこともわかった。これは、トライアスロンが日本でメジャーになり切れていないことによる競技人口の数と、3種目のうち一つでも本格的に取り組んでいた場合の優位性があるからではないかと考えられる。さらに、トライアスロンへのトランスファーを介して競技成績や人間関係への満足感を得られる選手が増えていることもわかった。これは、マイナーで規模の小さいスポーツであるがゆえに、他大学との交流が他のスポーツと比べて深く、互いに切磋琢磨しやすく、より親密な関係を築きやすいということからこのような結果になったのではないかと思う。

トライアスロンを行う上での課題としては、オープンウォータースイムや、自転車で公道をレースのように走れるスペース、トランジションの練習環境が整っていないことや、競技をするのに必要な初期費用や大会費用が高額であることが挙げられ、他大学との交流や練習場所の選別をすることで解決につながるのではないかと考えられる。

4. 結論

トライアスロンを始めたきっかけはさまざまではあったが、自身の経験してきた競技の特性を活かすことや、興味があった種目を通して活躍できる新たな環境が欲しいという選手が多いことが分かった。また、発展途上による競技人口の数からも、全国大会への門が広く、活躍の場を生みやすい環境でもあるため、現状の打破、成績への満足度、競技選手間でのコミュニティを大切にしたい選手にとってのトランスファー先の選択肢として取り組みやすい競技であった。一方で、学生という立場でありながらも大会エントリーや競技を始めるためにかかる費用が高いことや、練習環境の少なさが現在の課題であり、高額だが必要な機材、限られた場所でのレースといったすぐには解決できないものが多い。それでも、日本学生トライアスロン連合が一丸となり、競技面や生活面での成果を上げることによって世間の評価の獲得につながったり、練習環境が整っていない中でも他大学との合同練習や、情報の共有を通して質の高い練習をしたりすることで解決の糸口をつかめるのではないかと思う。

5. 卒業論文の執筆を終えて

自身が陸上競技の短距離からトライアスロンという新たな競技を大学より始め、何も知らない世界に飛び込んだことで見えた新しい価値観がトランスファーというものであり、マイナーであるがゆえに研究や調査を進めていく価値を見出すことができました。

本研究を進めるにあたり、担当教員の黒須先生をはじめとするさまざまな方からのご指導とご支援、ご協力いただきましたこと厚く御礼申し上げます。また、アンケートにご協力いただいた全国の大学生トライアスロンチームの皆様と顧問の先生方、インタビュー調査に答えていただいた5人の選手の方日本トライアスロン連合事務局・日本トライアスロン連合関係者の皆様からいただいた結果があったからこそその考察や今後のトライアスロン、トランスファーについて考えることができました。誠にありがとうございました。